

追悼 - 粉川昭平先生

Obituary: Professor Shohei Kokawa

粉川昭平先生が2001年10月25日に肺炎のため逝去された。享年74歳であった。心よりご冥福をお祈りしたい。

粉川先生は、日本植生史学会の芽生えからその後の歴史をもっとも温かく見守ってくださった。日本植生史学会の前々身である植生史研究談話会ができたのは1982年の4月であった。日本生態学会の大会が大阪市立大学で開催されるので若い者が新しい自由集会をやってはとの呼びかけがあり、私と南木睦彦氏、そして神戸大学の松下まり子氏の3人が話し合っ始めることになった。そのときの粉川先生は、若い者が中心になって大いにやったらええと励まされ、高温状態になっていた私たちを、どちらかというと粹がるだけではあかんぞと、冷静に、かつ謙虚に、長続きを願ってくださったように思う。植生史研究談話会とそれにつづく前身の植生史研究会の事務局は大阪市立大学理学部の植物分類学研究室(すなわち粉川研究室)にあり、辛うじて細々と続けることができたのは、粉川先生の温かい眼差しと理解があったからにほかならない。粉川先生なしで日本植生史学会はありえなかった。

経 歴

粉川先生は、1927(昭和2)年1月12日に奈良でお生まれになった。お名前の昭平は昭和に依拠しているとご本人から聞いた。長らく奈良教育大学におられた北川尚史先生と誕生日が同じであったので、お二人はなおのこと親しみ深かったと聞いたこともある。京都大学理学部地質学鉱物学科を1951(昭和26)年に卒業後、京都大学理学部大学院で約5年間、主として奈良の三笠山の火山地質と編年の研究を続けられた。このとき三笠山一帯で産出するたくさんの植物化石を採集され、三木茂先生に同定の指導を仰がれた。それが縁となって、1957(昭和32)年、京都大学の大学院を退学され、5月1日付けで大阪市立大学工学部の助手に赴任された。それから1990(平成2)年に教授で定年退職するまでの32年間、大阪市立大学理学部(1959年まで理工学部)で教育と研究に没頭され、三木茂先生の新生代の植物化石の研究を受け継ぎながらも、1970年代以降は自然科学と考古学の境界領域の開拓に専念され、いわば考古植物学の確立に努力された。1990(平成2)年からは大阪千代田短期大学の教授として7年間、講師として2年間、計9年間に教育に専念された。大阪市立大学を退職されてからは、標本の整理など研究面はもっぱら大阪市立自然史博物館でつづけておられた。

だれもが幾度となく語り継いでいるように、粉川先生は名誉心というものをまったくといっていいほど持っておられなかった。教室主任や委員長など長と名の付くものにはたいへ

ん閉口しておられたが、三木先生の後を受けて1974(昭和49)年以来27年間もつとめられた大阪市立自然史博物館友の会の会長と、住まいのある地元奈良の奈良植物研究会の会長は、傍目から見てもけっこう楽しんでやっておられたように思う。そこにはいつも、楽しい材料と人、そしてそれらが醸す話題があったからなのだろう。

研 究

粉川先生の研究の最大の特徴は、地質学のフィールド・ワークを基礎にしていることと、対象を一点に絞らず、面白いと思ったことは何でも取り込んでしまうことであろう。京都大学時代に取り組まれた三笠山の火山発達史と編年の研究においてもその旺盛な好奇心は遺憾なく発揮され、多産する植物化石を丹念に調べられるだけでなく、いっしょに産出する昆虫まで目が行き届いている。もっとも、植物や昆虫など自然界の何者にも興味を示すのは、子供の頃からであったと聞いている。そのため、地質現象と生き物たちを総合して自然の現象を理解しようとしておられた。だからこそ、何度も現地を訪ねられ、徹底して歩き回るといった習性を獲得されたのかも知れない。

助手として大阪市立大学に赴任されてからは、三木先生の指導のもとに、徹底してミツガシワの種子の遺体の研究に没頭された。三木先生はミツガシワ以外の研究をさせてくれなかったと本人から聞かされたことがある。この成果は「本邦におけるミツガシワ種子遺体の分布と層位」と題する学位論文となり、1962(昭和37)年、京都大学から理学博士が授与された。この基礎となるオリジナル論文は、1958(昭和33)年から1962(昭和37)年にかけて、大阪市立大学工学部紀要および生物学教室紀要に発表された。

ミツガシワの遺体の研究のためだけか、あるいは三木先生の研究の基盤になった近畿地方の新生代の地層に比較できるためであったかは明確ではないが、1960年代、粉川先生は関東平野南部の房総半島と横浜から東京西部一帯を歩き回り、露頭を見つけては丹念に植物化石の探索と採集をされた。房総半島に関しては、完新世と下総層群を主とする新しい更新世の植物化石が論文として発表されたが、本人が房総3部作と考えられていたように、もう一つ古い上総層群については未公表のままである。また、横浜から東京西部についても、1965(昭和40)年に、世界でも化石の記録は初めてであったハトノキ(ハンカチノキ) *Davidia* の内果皮化石の論文を発表されただけで、膨大な植物化石の記録は未公表のままである。この間、層序の照会を羽鳥謙三氏らと頻繁に行われていたことは残された書簡などから知ることができる。

関東での調査で興味深いのは、八王子北方の美根で石器を発見され、相沢忠洋氏に鑑定を依頼されていることで、相沢氏からの書簡やフィールド・ノート兼用の地形図に書き込まれた記述から知ることができる(図1)

1970年代に入ると、粉川先生の研究は考古学的な遺跡から産出した植物遺体を主な対象とされるようになった。これは、1960年代から頻繁に行われるようになった大規模な道路・鉄道建設などともなう遺跡の発掘調査に呼応するものであった。先に述べたように、粉川先生の研究の特徴はフィールド・ワークを基礎とすることであり、郵便や宅急便で容赦なく送られてくる植物遺体の同定には、最初のうちはともかくも、けっこう閉口しておられたようである。それでも断るといことはせず(たぶん断るなどということはまったくされなかったのではなからうか)、検討が遅れ、原稿もたいそう遅れ、督促する電話の相手側にいつも恐縮しておられた。遺跡の発掘調査では、新たな栽培植物が産出したとなるとたちまち大騒ぎとなるほどで、依頼主の方もそれを期待するものだから、粉川先生の本領発揮で、同定に対しての厳

しさと謙虚さを余すなく示しておられたように思う。ちょっとサービスしておこうかなどという妥協はけっしてされなかったように思う。種子や果実などのいわゆる大型植物遺体を対象とする研究者はきわめて少なかったため、考古学にとっての本格的な植物遺体の研究は、まさに粉川先生によって開拓されたといってもよいだろう。1980年代以降は、教子である南木睦彦氏や百原新氏に受け継がれていった。

粉川先生は1980年代、三木先生が収集・保存されていた標本を学術的に活用できるよう体系的に、かつ永久保存すべく画策され、南木・百原両氏も交えて大阪市立自然史博物館に保存の標本類の整理に取りかかった。その整理が一段落したのは1993(平成5)年で、その年の秋、11月6日~12月12日、「植物化石展メタセコイアと三木茂コレクション」が大阪市立自然史博物館で開催された。このとき、植生史研究会の事務局を中心に関係者が一同に集まった(図2)。粉川先生は整理が一段落したことをたいへん喜んでおられ、日頃はあまり飲まれない酒をけっこうやられた。整理はたいへんであったが、標本が残っていればこそ、こうして整理もできる

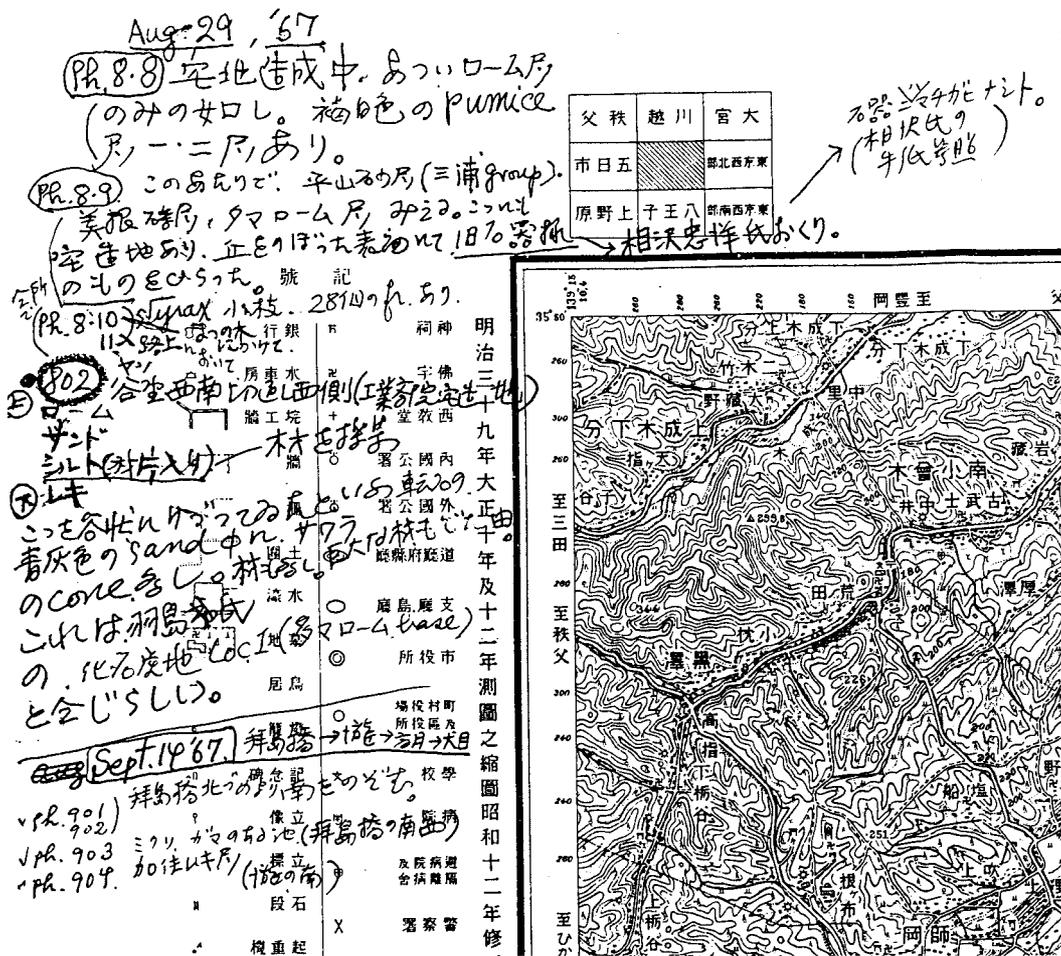


図1 フィールド・ノート兼用の5万分の1地形図。これは「青梅」図幅で、石器発見とその後の経緯が記述されている。

のだと嘸みしめておられた。粉川先生の古植物学は、現生の植物の観察、とりわけ組織や器官の解剖を基礎としており、研ぎ澄まされた観察眼と感性に裏付けられ、高められたといつてよい。セミナーでも植物解剖学の教科書を読まされたし、語学堪能よろしくドイツ語で書かれたチンメルマンのテローム理論も読まされた。三木先生の解剖という見方が下敷きにあることは、三木先生の初期の著作『山城水草誌』(1937)の記述とスケッチを見れば一目瞭然である。ただし、粉川先生がこれこれこの植物を見せてほしいと願われても、三木先生はなかなか見せてくれなかったとこぼしておられた。そのため、三木先生の書かれたものを貪るように読み込まれ、観察の方法などを盗み取っていかれたようである。三木先生の英語はなっとらんと笑いながらよくおっしゃったが、三木先生の英語論文の添削もついでになさっていたのかも知れない。粉川先生が持っておられた三木先生の論文の別刷は、粉川先生がいかに三木先生を知り、三木先生を越えようとされていたかを窺い知ることができる貴重なものである。三木先生が、ご自身の考えをどのように変えていかれたかが事細かにメモってある。かなり批判的に論文を呼んでおられたことがよく分かる。

粉川先生はすぐれた科学者や文学者の著作などから興味深い記述や発言を引っ張りだして整理しておられたが、三木先生については次のようなメモがある。「三木先生曰く。けなみのよい Taxonomist と、けなみのよくない、育ちの悪い Taxonomist とがある。自分は後者である。」

上で少し触れたように、粉川先生のフィールド・ワークで

のメモは、たいいてい5万分の1の地形図の欄外に残されていて、産地の情報、文献情報、その他に気づいたことのメモが所狭しと書き込まれている。露頭の断面図、柱状図まで書かれてある。地図そのものがフィールド・ノートだったのである。

粉川研究室

粉川先生が大阪市立大学に赴任して来られた1959(昭和34)年以前の理工学部は、こぢんまりとして領域も横断的で、自由な学風が育まれていたという。理学部分離のあと、生物学教室は、生理学系、発生生物学系、生化学系、生態学系、および植物園という系に整理されていき、それぞれの系に2つないし3つの研究室が含まれるという形を取るようになった。私が赴任した頃、生態学系は3つの研究室からなり、吉良竜夫先生の植物生態学研究室、粉川先生の植物分類学研究室、山岸 哲先生の動物社会学研究室であった。教授の定数に対して研究室数をはるかに多いので、教授のいない研究室、教員が3人でなく2人しかいない研究室があるのは当然で、このバランスを取るのに歴史的経緯をひきづりながら苦勞を蓄積している様子がよく分かった。粉川先生は、名誉心とか長とつく職がまったく馴染まない人であったことは多くの方が認めるところで、そのため、研究室の運営・維持にずいぶん苦勞された。粉川先生がとても大きな声で私を叱られたことが2度だけある。2度とも、生物学教室の運営に関してであった。滅多にないことなので記憶は定かである。

粉川先生も私も地質学の畑で育った。近しい科学であるの



図2 1993年11月25日、大阪市立自然史博物館の特別陳列『植物化石展 メタセコイアと三木茂コレクション』に集まった植生史研究会幹事会メンバーや教え子とともに。

に、こんなにも考え方や人間性が違うものかと驚き、かつなかなか馴染めなくて、のほほんともいいから処世術を身につけようと思った（たぶんそう思う）自分を振り返り、長年の粉川先生の心中が少しは察せられたものである。多勢の中の異質な一人というのは、その一人になってみないと分からないものである。

粉川先生の講義は、三木先生が植物の実物を見せておられたことをよしとされて、いつもさく葉標本や球果などいろいろなものを抱えて出掛けられた。講義の前は、木箱に収められた標本類を探し出すのが常だった。専門の3回生生物学実験は植物化石を扱うものと決まっていた。奈良や和歌山の更新世の地層を調査し、堆積物を採取してくるのである。現地を1日かけて歩き回ることが、おそらく粉川先生だけでなく学生も楽しかったに違いない。粉川先生は進んで学生と一杯やることはされなかったが、そこは私が担当したのである。持ちかえった試料を花粉化石用と大型植物化石用に分けて調べるといふもので、生物学の学生たちは意外な実験にとまどったり、わくわくもしていたようである。ひじょうに地味だったが、一人でも植物化石に興味を抱いてくれる学生が出てほしいという願いがあったに違いない。

私が大阪市立大学理学部の植物分類学研究室の助手として、すなわち粉川先生の助手として赴任したのは1980年4月であった。それからちょうど10年間、粉川先生のもとで自由奔放に研究をさせていただいた。私自身、粉川先生の学生のようなものであり、生き物としての植物を知ることへの意欲をかき立てたのは、粉川研究室での毎日の生活にほかならなかった。植物分類学をやりたいという学生は実に少なかった。私が赴任する前からいた南木睦彦氏は貴重な存在で、数年は実質的に3人が続いた（図3）。

大阪市立大学で三木先生が植物遺体の研究で理学博士を出されたのは、信州大学から大阪市立大学の大学院に來られ、中部山岳地帯の主として花粉分析の手法で完新世の植生変遷を新しい論理段階に高めた塚田松雄氏だけだった。それを受け継いだ粉川先生が主査として学位を出されたのは、松岡数充氏、私、南木睦彦氏、能城修一氏、松下まり子氏、大井信夫氏、小島夏彦氏と分野も多彩であった。これは、粉川研究室時代にたくさんの研究者が育ったことの証である。

粉川先生は1990（平成2）年に定年退職された。植物分類学研究室は私一人になる危機状態であったが、粉川先生の退職と入れ代わりに田村 実氏が助手として採用された。粉川

研ではなくなったが、植物分類学研究室は生き延びた。変則的ではあったが、助手2人で研究室を運営するという異例の措置が敷かれた。1995（平成7）年に私が大阪市立大学を辞したあと、1999（平成11）年4月、植物分類学研究室は植物園に移ることになった。粉川先生と恩師の三木茂先生とのかかわり、あるいは同じ研究室にいた花粉学の上野実朗氏、塚田松雄氏とのかかわりなど、ご自身が語られたエピソードは余りに多い。これらは粉川先生を知るのにさらに手掛かりとなるものばかりであるが、それらは大阪市立大学の植物分類学研究室史として別途まとめたいところである。ここでは以上のような概要に止め、ひとまず追悼の役を果たし終えることにしたい。

（辻 誠一郎、〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117
国立歴史民俗博物館）



図3 1982年3月、植生史研究談話会誕生前夜の粉川研究室のフルメンバー（左から粉川先生、辻、南木睦彦氏）。